

日本語のテキストにおける名詞の階層と参加者の中心性

野村 眞木夫*

(平成27年8月26日受付；平成27年10月28日受理)

要 旨

本稿は、日本語の文学的なテキスト（小説）にあらわれる人称表現に着目し、名詞と共感の階層、ダイクシスの範疇を活用して、テキストの参加者相互の中心性を判定する基準を整理し、その基準の有効性を実証する。その過程で、アルゴンキン語族に端的に見いだされる疎遠性・逆向形式などの現象を参照し、一般性の高い検討を目指す。

KEY WORDS

名詞	Substantivo	階層	Hierarkio	中心性	Centreco
人称	Persono	共感	Kunsento	テキスト	Japanaj tekstoj
疎遠性	Malproksimeco	逆向形式	Inversa formo	ダイクシス	Rekta referenco

1. 本稿の目的

本稿は、名詞の階層に関する研究史から、日本語の人称の階層を仮定し、日本語のテキストの参加者の中心性（周辺性）を仮定した野村(2014)で十分な検討がなされていなかった、テキストの参加者の中心性にかかる判定基準を整理し、これと共感の階層とダイクシスの範疇を参照しながら、その判定基準の有効性を検討することを目的とする。

2. 名詞の階層と人称の階層

本節では、名詞の階層と人称の階層についてこれまでに明らかにされていることがらを研究史的に整理し、日本語のテキストを理解する観点を検討する。

野村(2014)では、日本語の小説の地の文にあらわれるテキストの参加者（作中人物）の人称とそれを指示する名詞の意味的な階層とを交差させて(1)のシステムを仮定した。人称名詞とはいわゆる人代名詞であり、人間名詞とは職業・職階・性別等を表現する普通名詞である。

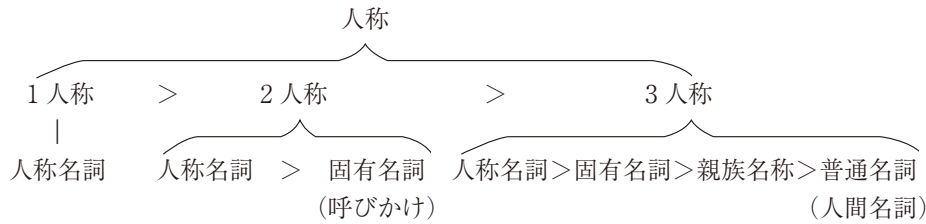
(1) 日本語の小説の地の文に使用される人称表現

- 1 人称：人称名詞
- 2 人称：人称名詞，固有名詞（呼びかけ）
- 3 人称：人称名詞，固有名詞，親族名称，普通名詞（人間名詞）

これは、Silverstein(1976,1987)，Dixon(1979)，Zubin(1979)，角田(2009)を参照しながら、日本語の近現代小説のテキストに使用されている人称表現にかかる語彙を調査した結果を整理したものである。Silverstein(1976,1987)たちの対象とする語彙には、人称表現のみならず、人間にかかわらない普通名詞類がすべてふくまれている。(1)では、それらを捨象してある。

このシステムに、さらにKuno and Kaburaki(1977)および久野(1978)で提案されている発話行為参加者の共感に関する階層と視点制約の仮定、および上記のテキストにあらわれるテキストの参加者の関係性とそこから仮定される共感あるいは言及のしやすさを、主に日本語の人称制限の観点から観察的に帰納して、(2)のような階層を導入した。これが日本語の小説の地の文における人称空間の仮定である。また、テキストの参加者が中心のか周辺のかについて、Zubin(1979)の仮定に従い階層(3)を導入した。

(2) 日本語の小説の地の文における人称空間



(野村2014: 186)

(3) 中心的 > 周辺の

(野村2014: 185)

具体的なテキストの表現においては、(2)と(3)のシステムが直積をなす。これが日本語の小説における人称空間の総体であり、そこに語り手や読み手が一定の様相で関係するのである。しかし、(3)には具体的な言語表現の標識が明らかになっていないので、これを実証的に検討し一般化する必要がある。これが本稿の課題である。

Silverstein(1976)やKuno and Kaburaki(1977)、久野(1978)による検討は、談話を視野にいれるとしても具体的な分析は統語論から意味論の範囲で行われており、テキストの水準の現象を対象とするものではなかった。とはいえ、それらを承けて展開された仕事は、テキストの水準における人称表現のシステムを検討するための基準となりうるはずである。これは、Kuno and Kaburaki(1977)の仕事が、発話行為参加者や共感または視点に関する規則を仮定するものだったからだけではない。Zubin(1979: 483ff)は、焦点の範疇をとりあげるとき、語られている場面 (narrated scene) との関係で理解をはかり、データを談話に求めている。たとえば、ドイツ語で書かれたある物語のなかで、出現する実体が、どの格で言及されるか、主格・対格・与格でどの程度連続的に言及されるかなどを調査し、そこから「自己中心尺度 (egocentric scale)」を規定する。これは、名詞句の階層や共感の範疇を参照することで、検討されている。

上記の仕事でことさらには言及されなかった文法現象として、Givón(1994)によって、名詞句に関してトピックとなりやすい様相の階層が仮定されている。これは、順向関係 (direct) と逆向関係 (inverse) の問題のなかで、その選択が談話における2人の参加者の相対的なトピックとしての性質に制約されていることが予測され、その基準として示されたものである。すなわち(4)がその階層であり、Givón(1994)は、アルゴンキン語族、アサバスカ語族などを検討し、ある事態の参加者がより上位の階層にあれば、それだけトピックになりやすいことを紹介している。たとえば、動作主のトピック性がより高ければ、それは近接的 (proximate) な格役割をとり、これに対する被動作主は疎遠的 (obviate) な格役割をとり、その節は能動的-順向的として特徴づけられる。被動作主のトピック性がより高ければ、格役割が逆転しその節は逆向関係となる。アルゴンキン語族などでこの現象は接辞で有標化されるので、実証可能である。これは、資料とするテキストのジャンルやタイプ、あるいは個々の事態の参加者のいかんによって左右されることが容易に予測できるものの、大局的にとらえたシステムの仮定としては一般性がたかく、有効性を発揮しよう。

(4) 全般的なトピックの階層：

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| a. Discourse participation: | speaker > hearer > 3rd-person |
| b. Animacy: | human > animate > inanimate |
| c. Agentivity: | agent > dative > patient |
| d. Gender: | male > female |
| e. Age: | adult > child |
| f. Size: | large > small |
| g. Possession: | possessor > possessed |
| h. Definiteness: | definite > indefinite |
| i. Anaphoricity: | pronoun > full-NP |

(Givón 1994: 22)

上記の現象として、日本語とは類型の異なる、アルゴンキン語族のブラックフット語に事例をもとめると、たとえば、(5)(6)(7)が典型例となろう。例文はFrantz(1971, 2009)により、その説明はFrantz and Russell(1995)も参照した。ブラックフット語で、名詞の単数・近接的では“-wa”，単数・疎遠的では“-yi”の接辞が認められる。なお、ここに引用する例は、すべて過去時制で訳されているが、継続のアスペクト形式や未来を指示する接辞が欠けていることで過去時制の可能性が生じ、過去のばあい通常はアクセントを欠く1つの音節にアクセントが置かれるばあいが

ある (cf. Frantz 2009: 36)。これらは、その事例に相当する。なお、アクセントや卓立の記述は、Frantz(2009)の方式に統一して引用した。‘3’は近接的な‘major third person’、‘4’は疎遠的な‘minor third person’を示す。グロスの矢印のうち、‘→’は順向の‘direct relator’、‘←’は逆向の‘inverse relator’を意味する。

- (5) Niistowa nitsinoáwa nohkówa. ‘I saw my son.’
my-self-3 I-see→3 my-son-3 Frantz (1971: 44)
- (6) Niistoyi nitsinóóka nohkówa. ‘My son saw me.’
my-self-4 I-see←3 my-son-3 Frantz (1971: 44)
- (7) Niistoyi, nitsinóóka annááhka nohkówahka. ‘My son saw *me*.’ Frantz (2009: 76)

(5)では、“niistowa”が、文に前置した1人称代名詞“niisto”のindependent pronounの形態である。通常、話し手または聞き手は、動詞の屈折以外には明示されなくても良いが、ここでは冗長に出現しており、emphatic pronounとして機能している。このばあい、人称代名詞は疎遠性の屈折を有する主語である必然性はないとされる。このため、“ohko” (son)は、1人称所有・単数の接辞“n-”と近接性の接辞“-wa”が現れている。“nitsinoáwa”は“I saw him”の意味で、“see”の意味の動詞語幹は有生の目的語をとる他動詞“ino”である。“nit-”と“-wa”がその他動的な人称の関係をなす。

この順向形式に対する逆向形式のばあいは、人称代名詞が主語として義務的になる。

(6)がその逆向形式の例である。“niistoyi”は、(5)のばあいと同様、1人称代名詞“niisto”に疎遠性を示す“yi”が後接した代名詞であり、やはりemphatic pronounとみなされる。“my son”が主語であることがこれによって明示される。“nitsinóóka”は、“he saw me”の意味で、“see”の意味の動詞語幹は有生の目的語をとる他動詞“ino”である。“ino”の接辞“nit-”と“-ok”がその他動的な人称の関係をなす。ただし、“-ok”は逆向性を意味する。

Frantz(2009)で、(7)に詳細なグロスは付されていないが、“niistoyi”は、emphatic pronounとされている。このように、emphasizeされた代名詞が文で前置されているとき、Frantz(2009)のtranscriptionでは、しばしばその直後にコンマが打たれており、(7)はその事例にあたる。“nitsinóóka”は、(6)同様、“he saw me”の意味である。“annááhka”は、“ann-wa-hka”のように分析され、“that-3s-invs”とグロスされる。すなわち“ann”が指示代名詞の語幹であり、受け手にとって近接性、話し手にとって非近接性を有する3人称単数である。“hka”は逆向性を意味する(以上Frantz 2009: 64ff)。ブラックフット語で、親族語彙はしばしば指示代名詞で修飾されるため、このような表現になる。

(5)(6)(7)の事例には、(4a, c, g)の階層が関係するが、話し手-3人称者、動作主-受け手、所有者-被所有者の関係から一貫性が失われたばあい、この言語では統語論的な水準でこれを補填する手段が講じられるのである。なお、Bliss(2005)とBliss and Jesney(2005)では、ブラックフット語の疎遠性と順向-逆向の範疇が文法化されている様相、および人称の標識とその階層について詳述されているが、本稿での言及は控える。

ここで、日本語の類例を挙げる。(8)および(9)の下線部である。なお、日本語の小説の地の文における人称の組み合わせは【表1】の4種類である。A~Gを以下の用例の末尾に記入しておく。

【表1】テキストの地の文における人称の組み合わせ

人称	A	C	E	G
1人称	1	1	0	0
2人称	1	0	1	0
3人称	1	1	1	1

(1はその人称が地の文に出現する、0は出現しないことを意味する)

(8) ①火がつけられた。②配給の油が、住職の死のためにたっぷり用意されたので、火は却つて雨に逆らつて、鞭打つやうな音を立てて募つた。③昼間の焰が、おびただしい煙のなかに、透明な姿で、はつきり見えた。④煙はふくよかに累なりながら、少しずつ崖のほうへ吹き寄せられ、ある瞬間には、雨の只中に、焰だけが端麗な形で立上つた。

⑤突然、物の裂ける怖ろしい音がした。⑥柩の蓋が跳ね上つたのである。

⑦私はかたはらの母を見た。⑧母は数珠に両手でつかまつて立つてゐた。⑨その顔はひどく硬く、掌の中へ入りさうなほど、ひどく凝固して小さく見えた。(三島由紀夫「金閣寺」『三島由紀夫全集6』新潮社【C】)

(9) ①「変人なんだから、今までもよく斯んな事があつたには有つたんだが、変人丈にすぐ癒つたもんだがね。不

思議だよ今度は」

②兄の機嫌買を子供のうちから知り抜いてる彼等〔父と母：引用者注〕にも、近頃の兄は不思議だつたのである。③陰鬱な彼の調子は、自分が下宿する前後から今日まで少しの晴間なく続いたのである。④さうしてそれが段々陰悪の一方に向つて真直に進んで行くのである。

⑤「本当に困つちまふよ妾だつて。腹も立つが気の毒でもあるしね」

⑥母は訴へるやうに自分を見た。

⑦自分は父や母と相談の揚句、兄に旅行でも勧めて見る事にした。

(夏目漱石「行人(塵勞十二)」『漱石全集 第十一巻』岩波書店【C】)

日本語の表現では、(8)⑦および(9)⑥にみるように、人称や親族間の関係に応じた統語論的な差異を認めることはできない。ダイクシスの中心は、1人称者に帰属する。テキストの水準での一貫性は、次のように説明が可能である。

すなわち、(8)では、文⑦の1人称者による自己言及的な介入によって、それまでの客体化した対象の描写から、母のありようを1人称者の観察を介した描写として限定する。⑦以下の観察者は一貫して理解することができる。(9)は、発話①の内容が、④まで親族間の状況として説明され、母による発話⑤と雁行または後行する母の行為が⑥で描写される。この意味で、⑤⑥には一貫性が認められる。ともに、人称に関係するダイクシスの中心性がテキストの自然さを保障していると理解できる。(5)(6)(7)の類型に直接起因していると理解する必然性は認めにくい。

以上のことから、名詞の階層や人称の階層は、個々の言語による変異が予測されるが、一般的な参照基準として認定しておくことの有効性が保障されると判断する。

3. 名詞・人称の階層と共感、近接性－疎遠性、順向形式－逆向形式

前節で、Kuno and Kaburaki(1977)や久野(1978)に言及した。本節ではここで中核的な範疇とされている「共感」に注目してみる。Kuno(1987: 206f)では、「共感 (empathy)」と「カメラ・アングル (camera angles)」を次のように規定する。これらを基準にして、共感あるいは視点の階層が認定される。

- (10) *Empathy*: Empathy is the speaker's identification, which may vary in degree, with a person/thing that participates in the event or state that he describes in a sentence.
- (11) *Degree of Empathy*: The degree of the speaker's empathy with x , $E(x)$, ranges from 0 to 1, with $E(x)=1$ signifying his total identification with x , and $E(x)=0$ signifying a total lack of identification.
- (12) The concept "a camera angle on x rather than y " can be represented as $E(x) > E(y)$ (namely, the degree of the speaker's identification with x is greater than with y). I will refer to relationships such as $E(x) \leq E(y)$ as empathy relationships.

前節で、近接性－疎遠性と順向形式－逆向形式の対応をブラックフット語によって観察したが、それ自体は日本語との間に対応する事象を認めることが困難である。しかし、次のように、この間に共感の概念を共通項として認めようとする仮説が提案されている。

Oshima(2007)は、日本語およびクリー語、ナバホ語、カチン語(ジンポー語)を対象として、順向－逆向の対立と疎遠性の標識をDIO標識(the direct/inverse opposition and obviation marking)と呼んで、言語的な共感にもとづいて検討する。要するに、DIO標識を支配するのは言語的な共感だという仮説をたてるのである。日本語の「やる／くれる」の対立、人称制限、所有制限、節の内部における複数の近接性の制限が主たる観点とされている。

またOshimaがしばしば言及するのは、Kuno(1987)の提案する“Descriptor Empathy Hierarchy”である。これは次のように規定されている。

- (13) *Descriptor Empathy Hierarchy*: Given descriptor x (e.g., *John*) and another descriptor $f(x)$ that is dependent upon x (e.g., *John's brother*), the speaker's empathy with x is greater than with $f(x)$.

$$E(x) > E(f(x))$$
 E.g. $E(\text{John}) > E(\text{John's brother})$ Kuno (1987: 207)

この階層は、先にブラックフット語の事例として指摘されている疎遠性に関する規則との間で整合性が認められる。この階層と矛盾する表現は、逆向形式が適用されることになるのである。もとより、このことをもって、日本語の構造に近接性－疎遠性や順向形式－逆向形式を導入することはできないが、Kunoが日本語を基準に提案した階層に、汎言語的な一般性が認められると主張することは可能である。

Oshimaは、名詞類の疎遠性は談話的要因によって決定されるという考え方、特に近接的3人称が談話のトピックになり、また近接的3人称が、しばしば話し手の共感の焦点であって、物語のなかで、近接性はその視点が表現されている人物と一致することが多いという考え方にもとづきながら、クリー語の(14)と(15)の例を示す。

(14)で、1つの節の中で近接的な参加者と近接的な被所有者は同一指示だが、(15)では所有者と被所有者は疎遠的であり、両者が近接的であったり、被所有者だけが近接的であることはない。所有者がすでに疎遠的であるとき、被所有者はより疎遠的だとされる。このグロスで、疎遠性は、数字ではなく()内に記述されている。

- (14) wa·pam-e·-w o-kosis-a
 see.obv.dir.3 3.son.obv
 'He_i (prox.) saw his_i (prox.) son (obv.).' Oshima(2007)の(28)
- (15) wa·pam-im-e·-w o-kosis-iyiw-m-a
 see.obv.dir.3 3.son.obv.obv
 'He_i (prox.) saw his_j (obv.) son (obv.).' Oshima(2007)の(33)

このような事例をもって、日本語に疎遠性の範疇がただちに認められてはいない。しかし、名詞の疎遠的な状態はその指示対象に対する話し手の共感を反映する、という仮説がたてられている。問われるのは、この仮説が、共感という認知的な水準の言語事象において一般化されるか、少なくとも整合するか、ということである。

上記(14)(15)の表現に近似する内容をもつ日本語の表現は、次のように例示できる。下線部である。

- (16) ①おれは助かったのだ！ ②帰りの自動車の中で駿介は繰り返し自分に叫んだ。③それは全く抑えることの出来ない感動であり、歓喜だった。④普通食を採るようになってからまだ日が浅いので、腹に力がなく足もよろめく感じだった。⑤冬シャツの上にとてらを着て温かにしていた。⑥彼は迎いに来た二人の妹をしげしげと見、それから眼を移して窓の外を見た。⑦季節はいつかすっかり移っていた。⑧外は春景色だった。⑨穂を抜いた麦畑の青が眼にしみ、日の光りはまぶしかった。⑩血の少なくなっている彼の肉体も、内から躍るようなものを感じた。⑪彼は自分が生きたのだということ、為さねばならぬ仕事のために生きたのだということを深く感じた。(島木健作『生活の探求』(二十二)新潮文庫【G】)
- (17) ①「もうよしなよ、つまらない」と苦しがって笑いながら女はいった。②「悪ふざける人はあの溝に捨てちゃうよ」
 ③女は丸っこく短い指で店の横を流れている幅二米ほどの下水路をさして叫んでいた。④かれとアシュレイと弟が、店の光をかすかにてりかえしているよどんだ水のごくわずかな流れを見た。
 ⑤「賭けをつづけよう」ときびしい声でアシュレイはいい、その手からダイスをとりあげようとする女の指をはらいのけた。
 ⑥「痛いじゃないか、アメ公」と女が腹を立てていった。⑦「しつこいわよ」
 ⑧「賭けをつづけよう」とアシュレイがためらっている弟にくりかえした。
 ⑨アシュレイと弟は賭け、弟が敗けた。⑩アシュレイは弟を余裕のある冷たい眼で、ごく短い時間見つめていた。(大江健三郎「戦いの今日」『死者の奢り・飼育』新潮文庫【G】)

(16)⑥と(17)⑩を(14)(15)のように添字を付して書き換えると、それぞれ次のようになる。

- (16)⑥' 彼は迎いに来た二人の(彼の)妹をしげしげと見、それから眼を移して窓の外を見た。
 (17)⑩' アシュレイ_iは(かれ_jの)弟を余裕のある冷たい眼で、ごく短い時間見つめていた。

(16)は、腸チフスが快癒した駿介が退院する過程である。①は自由直接引用で1人称の人称名詞が使用されているが、②以降は3人称による指示である。⑥に後続する⑦⑧⑨は「彼」の見た窓の外の対象が、彼をダイクシスの中心とし、彼の認知した視覚情報として描出されている。⑨の感覚表現は、彼に帰属する。彼が明らかに中心的な参加者

であり、彼の退院に付きそう 2 人の妹は周辺の位置づけになる。(17)の「かれ」と「弟」は、兄弟の関係にある。このテキストの他の部分では、「かれは考えた」「かれは思った」などの思考動詞の表現や、「かれ」を主体とする自由直接思考の表現があり、テキストの参加者「かれ」への共感度の高さが認められる。このことから、このテキスト全体では「かれ」が中心的な位置を占め、他の参加者は周辺の位置づけになる。ただ、(17)に関係する 4 人の参加者の関係では、一時的に「かれ」が傍観者であり、動作主であるアシュレイとその動作の対象である弟が行為の関与者である。しかし、「かれ」と「弟」が構成する(13)の関係は一定している。親族名称「弟」の一貫した使用は、この関係に優位に制約されているのである。Kuno(1987)の提案した(18)(19)の階層とも矛盾しない。ただし、この種の文の対比においては、近接-疎遠、順向-逆向の範疇の優位性が保証されるにはおよばない。

- (18) *Topic Empathy Hierarchy*: Given an event or state that involves A and B such that A is coreferential with the topic of the present discourse and B is not, it is easier for the speaker to empathize with A than with B:

$$E(\text{discourse-topic}) \geq E(\text{nontopic}) \quad (\text{Kuno 1987: 210})$$

- (19) *Surface Structure Empathy Hierarchy (revised)*: It is easier for the speaker to empathize with the referent of the subject than with the referents of other NPs in the sentence.

$$E(\text{subject}) > E(\text{other NPs}) \quad (\text{Kuno 1987: 211})$$

このように、(16)(17)について、テキスト全体または部分テキストを参照しながら、語り手とテキストの参加者との間の共感度と中心性を記述することができる。このことは、日本語の表現に疎遠性や順向-逆向の範疇を反映する様相があるということではなく、むしろ、(13)(18)(19)など共感に関する規則が優れて支配していることを意味するのだが、同時に小説のようなテキストを取りあげるときには、名詞句の階層、テキストの参加者、いわゆる作中人物の属性や中心性がこれと相関することを意味する。また、ダイクシスの範疇も優れて作用する。野村(2014)もふくめて共感の問題、名詞句の階層は多くの研究の蓄積が認められる。以上のことから、次のように整理される。

- (20) 日本語のテキストにおいて、テキストの参加者を指示する名詞の人称、その名詞の階層関係、参加者相互の所有・従属の関係が特定できる。また、人称や動詞に応じて、ダイクシスの中心性が特定できる。
 (21) 日本語のテキストにおいて、主題化の階層、語り手による共感の度合いが特定できる。
 (22) 日本語の感情・感覚を表す形容詞類、思考を表す動詞、願望の表現は、これが用いられるテキストのタイプ、文の構造上の位置、叙述の様相に応じて、感情・感覚および思考の主体の人称が制限される。(野村2014: 56)

(2)および(20)~(22)から言語現象として有効な事項を取りだして、それぞれテキストのなかで可能な属性を規定しなおすと、(23)のようになる。各項目のテキストにおける中心性の様相、テキストの参加者として中心的だと評価される程度は：の右に列挙したようになる。(23a)と(23b)は、当該の名詞について一意的に認定される。これについては、先に(2)として仮説を提案し、野村(2014)で一定の妥当性を認定している。(23c)は、当該のテキストの語り手がそのテキストの参加者であるかどうか依存して認定される。(23d)は、当該の名詞または名詞句について、その表現を参照することで形式的に認定される。(23e)は、その名詞句が対応する叙述との関係に応じて、1文の内部で認定される。(23f)は、表現形式と名詞の指示対象を特定することで認定される。これらを参照しながらテキストの参加者の中心性の様相、すなわち(3)を評価するのである。

- (23)a. 人称 : 1 人称 > 2 人称 > 3 人称
 b. 名詞の階層 : 人称名詞 > 固有名詞 > 親族名称 > 普通名詞 (人間名詞)
 c. 語り手と任意の参加者の関係 : 同一指示 > 非同一指示
 d. 主題化 : あり > なし
 e. 人称制限の解除 : あり > なし
 f. 名詞の所有関係「名詞₁の名詞₂」 : 名詞₁ > 名詞₂

4. テキストにおける人称表現の中心性と周辺性

本節では、テキストの参加者の中心性の様相をどのように規定できるかを、テキストの類型別に検討する。

4. 1 類型A・C

まず、【表1】の類型AとCの例を取りあげて、(23)の項目とテキストの参加者の中心性がどのように評価されるかを検討する。この類型では、語り手は1人称者と一致する。

- (24)①「どうしてこんなに変っちゃつたんだらうなあ。あんなに私に何もかも任せ切つていたやうに見えたのに……」と私は考えあぐねたやうな恰好で、だんだん裸根のごろごろし出して来た狭い山径を、お前をすこし先きにやりながら、いかに歩きにくさうに歩いて行つた。②そこいらはもうだいぶ木立が深いと見え、空気はひえびえとしてゐた。③ところどころに小さな沢が食ひこんだりしてゐた。④突然、私の頭の中にこんな考へが閃いた。⑤お前はこの夏、偶然出逢つた私のやうな者にもあんなに従順だつたやうに、いや、もつともつと、お前の父や、それからまたさういふ父をも数に入れたお前のすべてを絶えず支配してゐるものに、素直に身を任せ切つてゐるのではないだらうか？(堀辰雄「風立ちぬ(序曲)」『堀辰雄全集第一巻』筑摩書房【A】)

類型Aの(24)で、ダイクシスの中心をなす参加者は、移動の動作主である1人称者「私」と2人称者「お前」である。この作品の1人称者は、野村(2014: 179f)でも述べたとおり、2重下線部のように客体化された表現がなされているが、①の波線部の動作主、④の思考の経験者とその思考の対象から、中心性は1人称者に帰属すると判定する。3人称者には親族名称「父」が使用されており、「お前の父」という所有関係において、2人称者に対してその親族が従属している。(2)の階層に整合し、人称制限への違反は認められない。

- (25) ①そんな或る日の午後のこと、私が行くと、丁度父は外出してゐて、節子は一人で病室にゐた。②その日は大へん気分もよささうで、いつも殆ど着たきりの寝間着を、めずらしく青いブラウスに着換へてゐた。③私はさういう姿を見ると、どうしても彼女を庭へ引っぱり出さうとした。④すこしばかり風が吹いてゐたが、それすら気持のいいくらゐ軟らかだつた。⑤彼女はちよつと自信なささうに笑いながら、それでも私にやつと同意した。⑥さうして私の肩に手をかけて、フレンチ扉から、何んだか危かしさうな足つきをしながら、おづおづと芝生の上へ出て行つた。⑦生牆に沿うて、いろんな外国種のも混じつて、どれがどれだか見分けられないくらゐに枝と枝を交はしながら、ごちやごちやに茂つてゐる植込みの方へ近づいてゆくと、それらの茂みの上には、あちらにもこちらにも白や黄や淡紫の小さな荳がもう今にも咲き出しさうになってゐた。⑧私はそんな茂みの一つの前に立ち止まると、去年の秋だつたか、それがさうだと彼女に教へられたのをひよつくり思ひ出して、「これはライラックだつたね？」と彼女の方をふり向きながら、半ば訊くやうに言つた。

(堀辰雄「風立ちぬ(春)」同：【C】)

同じテキストで、類型Cの(25)では、(24)の1人称者は「私」のままだが、2人称者は固有名「節子」および人称名詞「彼女」で指示されている。父は不在であり、ここでも周延的である。「彼女」は②⑤⑥で動作主、「私」は①③⑧で動作主となっていて、ガ格主語または主題となる動作主の階層は均等と言えよう。⑦の動作主は両者とみなすことができ、移動の仮定でダイクシスの中心はこの2人と判定される。②の「よささう」を判定する主体は1人称者、⑥の「出て行つた」の共感度は3人称者に高く、この部分テキストの中心性が特に1人称者に傾斜していると判定する標識は認めにくい。⑦の「近づいてゆく」の動作主や状況の観察者は私と彼女の複数とみなされる。ただし、⑧にいたると、「教へられた」の被動作主、「思ひ出して」「言つた」の主体は、主題化された1人称者である。久野(1978: 169)が、受身文が主語寄りの視点を要求し、その旧主語(二格動作主)寄りの視点を取ることが困難である、要するに共感度が低い、と述べた規則(表層構造の視点ハイアラーキー)と矛盾しない。これは、後にKuno(1987)で修正された(19)に対する暫定的な規則であるが、この例の1人称者「私」に中心性があると判定する根拠となる。このように(被)動作主性を基準の1つに想定するならば、(被)動作主を指示するガ格主語または主題とテキストの中心性との関係を仮定することができる。この段階で、一般化された(19)との整合性が了解される。

- (26) ①私達はその月末に八ヶ岳山麓のサナトリウムに行くための準備をし出してゐた。②私は、一寸した識合ひになつてゐる、そのサナトリウムの院長がときどき上京する機会を捉へて、其処へ出かけるまでに一度節子の病状を診て貰ふことにした。

③或る日、やつとのことで郊外にある節子の家までその院長に来て貰つて、最初の診察を受けた後、「なあに大したことはないでせう。まあ、一二年山へ来て辛抱なさるんですなあ」と病人達に言ひ残して忙しさうに帰つてゆく院長を、私は駅まで見送つて行つた。④私は彼から自分にだけでも、もつと正確な彼女の病態を聞

かしておいて貰ひたかつたのだつた。

⑤「しかし、こんなことは病人には言わぬやうにしまへ。^{フツツ}父親にはそのうち僕からもよく話さうと思うがね」院長はそんな前置きをしながら、少し気むづかしい顔つきをして節子の容態をかなり細かに私に説明して呉れた。⑥それからそれを黙つて聞いてみた私の方をぢつと見て、「君もひどく顔色が悪いぢやないか。ついでに君の身体も診ておいてやるんだつたな」と私を気の毒がるやうに言つた。

⑦駅から私が帰つて、再び病室にはひつてゆくと、父はそのまま寝てゐる病人の傍に居残つて、サナトリウムへ出かける日取などの打ち合わせを彼女とし出してゐた。⑧なんだか浮かぬ顔をしたまま、私もその相談に加はり出した。
(堀辰雄「風立ちぬ(春)」同【C】)

(26)も(25)と同じ類型である。この部分テキストの参加者は4人である。この4人の行動の記述が中核をしめる。まず、②③④⑤にあるテ形の授受動詞や「ゆく」の運用によって、1人称者の中心性が保障される。人称表現の使用では、①の「私達」は、「私」「節子(彼女・病人)」「(節子の)父」の3人を包含する。「私」と「父」はそれぞれ人称名詞と親族名称で(25)と一貫している。「節子」は固有名詞と人称名詞のほか、(26)では、その属性としての普通名詞「病人」でも指示される。②以下ではさらに「院長」が参加者となる。「院長」は、このテキストで姓名は示されず、普通名詞と人称名詞で一貫する。このテキストでは、その属性をもって参加する以外には、特に言及されることは認められない。問題になるのは、「節子(彼女)」が「病人」として言及されることである。この語は、このテキストで(26)③の「病人達」が初出である。以下、「節子」「彼女」と「病人」が並列する。「病人」の語は節子によって自己言及される発話もある。この語の出現は56回であり、そのうち節子を指示しない事例は、総称指示を含めて5回である。要は、サナトリウムとの関連語句としてこの語が選択されているのだが、このテキストでは「病人の枕元」「病人の側」などの連語が認められ、その属性が顕著に認知される部分にしばしば集中して用いられている。一例を示すと、次の(27)のようである。①「絶対安静」の状況の描写と思考の記述である。他の部分テキストでは「節子」「彼女」で言及されていた参加者について、その属性の1つを普通名詞で選択的に使用して言及する表現であるため、語り手からの距離が大きくなり、一般に共感性が低くなる。特にこのテキストのばあい、当該の参加者に対する否定的な印象を濃くする効果が認められる。

(27) ①絶対安静の日々が続いた。

②病室の窓はすっかり黄色い日覆を卸され、中は薄闇くされてゐた。③看護婦達も足を爪立てて歩いた。④私は殆んど病人の枕元に付きつきりでゐた。⑤夜伽も一人で引き受けてゐた。⑥ときどき病人は私の方を見て何か言ひ出しさうにした。⑦私はそれを言はせないやうに、すぐ指を私の口にあてた。

⑧そのやうな沈黙が、私達をそれぞれ各自の考への裡に引つ込ませてゐた。⑨が、私達はただ相手が何を考へてゐるのかを、痛いほどはつきりと感じ合つてゐた。⑩そして私が、今度の出来事をあたかも自分のために病人が犠牲にしてゐて呉れたものが、ただ目に見えるものに変つただけかのやうに思いつめてゐる間、病人はまた病人で、これまで二人してあんなにも細心に細心にと育て上げてきたものを自分の軽はずみから一瞬に打ち壊してしまひでもしたやうに悔いてゐるらしいのが、はつきりと私に感じられた。

(堀辰雄「風立ちぬ(風立ちぬ)」同【C】)

次の例は類型Cだが、1人称者が中心的な位置を占めない例としてとりあげる。

(28) ①「ミケ、もう気がすんだか？」

②抱き上げるとミケは「……ナン……ナン」というやうな、鼻濁音の濁点がないやうな、最大級に甘えて訴えかける声で鳴いた。

③「まだだつてさ」

と言っていると店の向こうの道から森中の声が聞こえてきて(すでにポッコはテーブルの下からずりつと体を半分出してそれに注意を向けた)、三人で顔を見合せていると、本当に森中と浩介が入ってきた。

④「あれえ？ ローズ・ショックから立ち直ったんすかあ？」

⑤森中は酒が入っている赤い顔をして、いつもよりさらに声が大きくなっていた。

⑥「さっき、パンパン、メガホン叩いてた」綾子が言った。

⑦「なんか、この家、暑くないですかあ？」

そこ開けましょうよ」

- ⑧「森中が脱げばいいじゃん」
 ⑨「でもなんか開けたいじゃないですか」
 ⑩森中は縁側のサッシを開けて、「ミッケッちゃーん」と言って私の足許にいたミケを抱こうとしたが、不気味がつてミケはL字の角まで逃げてしまった。
 ⑪「なんか戻ってくることになっちゃったんだ」
 ⑫浩介が綾子の隣りにすわって二人に言っていた。(保坂和志『カンパセーション・ピース』(6)新潮社【A】)

(28)で1人称者がダイクシスの中心に位置することは、「聞こえてきて、入ってきた」がこれを保障するが、この中心は③の「三人」が構成していて、1人称者だけが優位なのではない。1人称者が動作主であるのは、②「(ミケを)抱き上げる」③「と言っている」の主体と③「三人で顔を見合わせている」の相互動作の1員としてであり、他の文の動作主は猫を含む「私」以外の主体である。1人称者は語り手かつ観察者としての機能をになうが、他の参加者に対する積極的な働きかけを認めにくい。引用部分の後半は、他の参加者が動作主となっている。1人称者は、他の参加者の関係に対する媒介者としての機能が中核となり、中心的な参加者としての属性が後退する。このことから、(23c)に修正をほどこし、また、これまでの事例の観察により動作主の属性を中心性の基準として新たに仮定する。

- (23)c'. 語り手と任意の参加者の関係(修正): 同一指示 \geq 非同指示
 g. 動作主 : 動作主 $>$ 非動作主

4. 2 類型E

類型Eは、地の文に1人称を欠き、語り手は無人称とみなされる(野村2014)。

- (29) ①翌日、あなたはL女子大の試験をうけにいつた、その帰りあなたが馬町にでて電車を待つてゐるとき、生粋の京都人らしい顔だちの中年婦人に話しかけられた、彼女はあなたを自分の家に下宿させたいといつてゐた。②あなたは祇園までの電車のなかで早速その話をきめてしまった。③そしてその家、馬町からすこしのぼつた三叉路のところにある家が、京都であなたが最初に下宿する家になつたのだつた……
 (倉橋由美子『暗い旅』(Ⅱ)東都書房【E】)

(29)では、2人称者は人称名詞「あなた」で一貫する。3人称者の「中年婦人」は、直後に人称名詞に変換されるが、普通名詞の段階では受け身文の二格動作主である。(25)の例にそくしてとりあげた、久野(1978: 169)の、受身文が主語寄りの視点を要求しその旧主語(二格動作主)寄りの視点を取ることが困難である、という事象を含意する(19)の規則がある。この規則を参照すると、受け身文で普通名詞が選択され、後続の「いつてゐた」の主題、すなわち動作主を指示する語句として人称名詞が選択されたことに関しても、矛盾は認められない。2度目の言及では初対面の段階における共感度の低さが緩和されて、人称名詞で指示されたのである。主たる動作主としての属性や意志決定の主体は2人称者でガ格主語または主題である。ここから人称の階層は、[2人称 $>$ 3人称]であり、この部分テキストでは2人称者が中心的であることが主張できる。

4. 3 類型G

類型Gでは、語り手は無人称、テキストの参加者は地の文で3人称で指示される。

- (30) ①その聖子は、新聞をひろげているビリケンさんを認めると、目にとまらぬほどかすかに眉をひそめ、決して行儀のよいとはいえぬ桃子の姿勢を見るときも眉をひそめた。②しかし彼女はただこう言った。
 ③「龍さまはまだ？」
 ④「龍さま？ お二階じゃない？」
 ⑤桃子はもう一度、聖子の姿を見、さすがに羨ましげに「また出かけるの？」と口に出しそうになったが、しかし彼女はあやうくその言葉を呑みこんだ。⑥「お出ましになるの？」と言わなければならないのだ。⑦そうでないときと姉は叱るにきまっている。⑧桃子が物心がつてからの記憶にある聖子は決してそんな姉ではなかった。⑨もちろん十三も齢の違う龍子から小言をいわれるのならこれは仕方がない。⑩「奥」に閉じこもっている母親はあまりにかけ離れた存在であったし、龍子が桃子にとって姉というより母に近く感じられる

のは自然のことである。⑪しかし、かつては遊び友達であったはずの聖子までがへんにつんとして、自分より上の姉の味方に変じていったことは、どうしたって桃子には癪にさわることであった。⑫学習院がいけないのだ、と彼女はわけもなくそう考えた。(北杜夫『楡家の人びと』(第一部第一章)新潮文庫【G】)

ここでは、龍子・聖子・桃子の姉妹、長女・次女・三女が主たるテキストの参加者である。ピリケンさんは彼女たちの生家である病院の患者の1人であり、周辺的な位置づけである。

聖子・桃子は、それぞれ人称名詞でも指示される。固有名詞から人称名詞に変換されるのは、ここでは直前に主題化された指示対象からの連続性によっている。この使用は久野の表層構造の視点ハイアラーキーと矛盾しない。親族名称「姉」は、龍子・聖子の双方に対して使用されている。ただし⑩の「姉」は、総称的な使用である。親族名称の使用は(2)で仮定した階層では、人称名詞・固有名詞より下位に位置し、指示対象となる参加者間の属性のうち年齢の差を抽出した表現である。(30)の展開は、桃子を中核として、年齢差によって生成される3人の行動やこころの働きが基調になっているのである。思考や内省の叙述は桃子に帰属しており、中心性は桃子に認められる。

次に取りあげる(31)と(32)は、全体で25節からなるテキストからの引用で、(31)は第4節、(32)は第24節にあたる。この2つの節の間に認められる人称表現の用法に、若干の差異がある。

- (31) 滝良精氏が現われたのは、三十分ばかり待たされた挙句だった。そろそろ退屈して大理石の床を徘徊したい欲望を起こしかけた時だった。

滝氏は、頑丈な体格で、背が高い。眼鏡を掛けた顔は彫りが深く、手入れの届いた半白の髪も、日本人離れた特徴のある面貌に相応しい。実際、添田が椅子から立って正面に向き合った時、圧倒されるくらい滝氏は堂々としていた。外国人の間に立ち廻って決してひけを取らないだけの貫禄を思わせた。

「滝です」

添田の名刺を指に摘まんで、理事は言った。添田が挨拶すると、

「お掛けなさい」

と椅子を手で示した。

(松本清張『球形の荒野』(4)文春文庫【G】)

- (32) 添田はエレベーターに乗った。四階で降りて416号室の前に立ったとき、さすがに動悸が早鳴りした。添田は息を吸いこんでドアをノックした。

内側から低い応答があった。添田はドアの把手を廻した。

思いがけないことだったが、すぐ真正面に滝良精が立っていた。ノックを聞いて、ここまで迎えに出たのだろうか、これが、いきなり、対決の恰好になった。

「お邪魔します」

添田が敬礼すると、窓を背にしている加減で滝の顔は黒かったが、その逆光の中にも、これまでにない彼の表情を見ることが出来た。滝はあきらかに微笑しているのだった。(松本清張『球形の荒野』(24)同【G】)

ともに滝と添田の2人が部分テキストの参加者であり、両者が話し合いに入る直前の場面である。受け身表現の主体、願望や思考・感覚の表現、位置関係の描写などから、ダイクシスの中心および部分テキストにおける中心性は添田に帰される。(31)では滝に敬称「氏」が用いられている。この2人の対峙する場面では、(33)のように敬称のみによる「氏」も人称名詞として使用されている。

- (33) 添田は、ときどき総合雑誌などで見る滝氏の硬質な文章を、氏の人間に見る思いがした。

(松本清張『球形の荒野』(4)同【G】)

またこの参加者に人称名詞は使用されない。さらに職階としての普通名詞「理事」も使用されている。要するに、滝に対しては、敬称と職階の使用によって一定の待遇的な価値が付与され、このことによって人称空間における共感度は低いと判定される。後続する(32)では、先ず滝から敬称が外されている。また、人称名詞には「氏」でなく「彼」が使用されている。この段階で、滝は理事を辞職しているため、この職階は使用されない。待遇的価値が低下したことにより、滝に対する共感度や言及のしやすさは、(31)に比して高められていると評価される。

(31)と(32)で使用される人称表現の差異により、ストーリーの展開を想定しないとしても、テキストの参加者間の関係の変化を読み取ることが可能である。

4. 4 まとめ

以上、想定した4つのテキストの類型から、人称表現の階層と中心性を検討してきた。野村(2014)で提案した(2)と、Kuno and Kaburaki(1977), 久野(1978), Kuno(1987)で提案された共感に関する階層と、その関連する仮説を参照して仮定した(23)の項目を参照しながら、日本語のテキストの参加者について、それぞれのテキストでどのように中心性を評価できるのかを検討してきた。(23)は、cを修正し、gを加えて(34)のようになる。

- (34)a. 人称 : 1人称>2人称>3人称
 b. 名詞の階層 : 人称名詞>固有名詞>親族名称>普通名詞(人間名詞)
 c. 語り手と任意の参加者の関係(修正) : 同一指示 \geq 非同一指示
 d. 主題化 : あり>なし
 e. 人称制限の解除 : あり>なし
 f. 名詞の所有関係「名詞₁の名詞₂」 : 名詞₁>名詞₂
 g. 動作主 : 動作主>非動作主

本稿の範囲では、(34)とKuno(1987)の共感に関する階層を援用することで、日本語のテキストにおける参加者の中心性は評価可能であった。また、言語的な共感を重視するOshima(2007)の考え方は、支持されるものと判断する。

以上の検討を前提に、野村(2014:202【表9】)で提案した日本語のテキストにおける人称の組み合わせと参加者の中心性、語り手の人称に関する属性の表を、A₃およびC₂の3人称について一般化し、【表2】として示しておく。

【表2】テキストにおける人称の組み合わせと参加者の中心性、語り手の人称(一般化)

人称 \ 類型	A	C	E	G
1人称	1	1	0	0
	A ₁ : 語り手 \wedge 中心的 A ₂ : 語り手 \wedge 周辺の A ₃ : 語り手 \wedge 周辺の	C ₁ : 語り手 \wedge 中心的 C ₂ : 語り手 \wedge 周辺の		
2人称	1	0	1	0
	A ₁ : 周辺の A ₂ : 中心的 A ₃ : 周辺の		E ₁ : 中心的	
3人称	1	1	1	1
	A ₁ : 周辺の A ₂ : 周辺の A ₃ : 中心的 \vee 周辺の	C ₁ : 周辺の C ₂ : 中心的 \vee 周辺の	E ₁ : 周辺の	G ₁ : 中心的 \vee 周辺の
無人称	0	0	E ₁ : 語り手	G ₁ : 語り手

(\wedge は連言, \vee は強選言を意味する)

5. むすび

本稿では、次の3つの事項を明らかにした。

- 人称表現、人称、話し手・聞き手の階層を、一般的に仮定することが可能である。
- 久野の提案した共感に関する階層についての仮説群を、テキストにおける人称の階層やテキストの参加者の中心性を分析する基準として認定することが可能である。またダイクシスの範疇がこの認定に有効である。
- テキストの参加者の中心性を、上記b.と本稿(34)に示した項目を基準として、判定することが可能である。

文体論的な水準の事象を、どこまで言語学的な根拠をもった手順によって評価することができるか、また一般化することができるか、という問いが本稿の基盤にある。ここでは、テキストまたは部分テキストの参加者の中心性という側面に限定して議論を展開した。ただ、この議論にしても、そもそも中心性をなう参加者を欠くテキストが生成されれば、少なくとも一部には論理の欠損が生じていることになる。たとえば、集団としての参加者が想定されるばあい、そのテキストに唯一的な参加者の中心性を問うことは失効しうる。ただこのとき、部分テキストの規模をどの範囲に制約するかによって、結果の左右されることも予測される。本稿では、ガ格主語と主題とを明確に区分せずに

あつてきたが、これはさらに厳密な検討を要する。また、日本語において近接－疎遠、順向－逆向に対応する範疇を検討するためには、山田(2004)、Oshima(2007)、澤田(2007)、住田(2011)などで言及されている文の類型をテキストの中で観察する必要がある。

上記のような未解決の問題を内在させつつ、名詞の階層とテキストの参加者の中心性は一定の関係を有し、また判定基準を形式的に仮定することが可能であることを論証した。

【文 献】

- 久野 暉 1978 『談話の文法』大修館書店
- 澤田 淳 2007 「日本語の授受動詞構文が表す恩恵性の本質—「てくれる」構文の受益者を中心として—」『日本語文法』7(2) : 83-100.
- 住田哲郎 2011 『移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能』神戸大学博士学位論文
- 角田太作 2009 『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房
- 野村眞木夫 2004 「談話分析から見た主語」『言語』33(2) : 34-40.
- 野村眞木夫 2014 『スタイルとしての人称—現代小説の人称空間—』おうふう
- 野村眞木夫 2015 「第106回大会 研究フォーラム報告 人称の表現と文体」『文体論研究』61 : 71.
- 野村眞木夫 2015 「日本語の小説における人称の表現と文体」『文体論研究』61 : 72-73.
- 山田敏弘 2004 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院
- 渡辺 実 1993 「「ひとごと」風「私」小説の表現—堀辰雄『風立ちぬ』の文章—」『上智大学国文学科紀要』10 : 115-129.
- Aissen, J. 1997 On the Syntax of Obviation. *Language*. 73(4): 705-750.
- Aoki, H. 1970 *Nez Perce Grammar*. University of California Press.
- Bliss, H. 2005 Topic, Focus, and Point of View in Blackfoot. in *Proceedings of the 24th West Coast Conference on Formal Linguistics*, John Alderete et al. (eds.) Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project. 61-69.
- Bliss, H. and K. Jesney 2005 Resolving Hierarchy Conflict: Local Obviation in Blackfoot. *Calgary Papers in Linguistics* 26 : 92-116.
- Dahlstrom, A. 1986 *Plains Cree Morphosyntax*. Department of Linguistics U. C. Berkeley.
- Dixon, R. M. W. 1979 Ergativity. *Language*. 55(1): 59-138.
- Frantz, D. G. 1966 Person Indexing in Blackfoot. *International Journal of America Linguistics*. 32(1): 50-58.
- Frantz, D. G. 1971 *Toward a Generative Grammar of Blackfoot*. University of Oklahoma.
- Frantz, D. G. 2009 *Blackfoot Grammar* (second edition). University of Toronto Press.
- Frantz, D. G. and N. J. Russell 1995 *Blackfoot Dictionary of Stems, Roots, and Affixes* (2nd ed.). University of Toronto Press.
- Givón, T. 1994 The pragmatics of de-transitive voice: Functional and typological aspects of inversion. in Givón ed. *Voice and Inversion*. John Benjamins. 3-44.
- Kuno, S. and E. Kaburaki 1977 Empathy and Syntax. *Linguistic Inquiry*. 8(4): 627-672.
- Kuno, S. 1987 *Functional Syntax: anaphora, discourse, and empathy*. The University of Chicago Press.
- Oshima, D. Y. 2007 Syntactic Direction and Obviation as Empathy-based Phenomena: a Typological Approach. *Linguistics: An Interdisciplinary Journal of the Language Sciences*. 45(4): 727-764.
- Silverstein, M. 1976 Hierarchy of features and ergativity. in Dixon, R. M. W. ed. *Grammatical Categories in Australian Languages*. Australian Institute of Aboriginal Studies. 112-171.
- Silverstein, M. 1987 Cognitive Implications of a Referential Hierarchy. in Hickmann, M. ed. *Social and Functional Approaches to Language and Thought*. Academic Press. 125-164.
- Zubin, D. A. 1979 Discourse Function of Morphology: The Focus System in German. in Givón, T. ed. *Syntax and Semantics*. 12. Academic Press. 469-504.
- Wolfart, H. Ch. 1973 'Plain Cree: A Grammatical Study.' *Transactions of American Philosophical Society, New Series*. 63(5): 1-90.

Hierarkio de substantivo kaj centra partoprenanto en japanaj tekstoj

Makio NOMURA*

RESUMO

En tiu ĉi artikolo, mi aranĝas la kriteriojn kion ni determinas la centran partoprenanton de japana fikcia teksto. Por tiu celo, mi aplikas la regulojn de substantivaj hierarkioj, kunsentajn hierarkiojn kaj rektan referencan kategorion. Kaj, mi demonstras la kriteriojn per japanaj noveloj. En tiu ĉi procezo, mi referencas la personan malproksimecon kaj la inversan formon de algonkena lingva familio, por la universala principo.

* Humanities and Social Studies Education